

## 新型コロナウイルス感染症の拡大に伴う発達障害児者への影響Ⅱ

### —保護者・家族向けアンケート結果より—

企画・情報部 発達障害情報・支援センター 赤塚望 与那城郁子 林克也 加藤潔  
島山和也 西山秀樹 中澤将人 田中優輝 矢野美穂 進藤玲子 西牧謙吾

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、＜新しい生活様式＞の実践がすすめられている。このような状況下では、発達障害児者だけでなく、支援者である保護者・家族も何らかの困りや変化等を感じている可能性が高い。現在の発達障害児者の状況をより幅広く捉えるために、保護者・家族向けアンケート調査を実施することとした。

発達障害児者の保護者・家族を調査対象とし、令和2年7月2日～8月17日にかけてWEB アンケートを実施した。調査内容は、「Ⅰ. ＜新しい生活様式＞の実践に伴う本人の生活の変化や困り感等に関すること」、「Ⅱ. 最近の本人の様子とこれからの生活に関すること」とし、合計10問の質問を設定した。回答の送信をもって調査協力に同意したものとみなし、その旨をアンケートフォームに記載した。アンケートフォームでは個々の回答者の特定はできず、全体の集計結果とすることで個人情報保護した。

回答件数は500件で、発達障害児者本人の年代は、「18歳以上」と「小学生」が最も多かった。診断名別では、ASDの割合が最も高く、次いで知的障害とADHDの割合が高かった。

日常生活における本人の困りとして多かったのは、「熱中症を防ぐために『人がいない場所ではマスクをはずして良い』と伝えているが、うまく判断できない」(48.2%)、「行きたい場所に行けなくなり、イライラしている」(48.2%)であった。マスク着用については、「抵抗なくマスクをしている」(51.8%)、「がまんして、マスクをしている」(35.2%)、「マスクをすることが難しい」(13.0%)と、約半数がマスク着用に困難を感じていることがわかり、その理由として、触覚や嗅覚等の過敏、息苦しさや体温調節の難しさ等が挙げられた。本人が過ごしやすくなるように工夫した点については、「本人に合うマスクを作製/入手した」、「手洗いやマスクをしなければいけない状況について、視覚情報を使って本人にわかるように説明した」等の自由記述を得た。また、＜新しい生活様式＞が始まり、本人にとって良かったこととしては、「お店や病院で人が減り、快適になった」、「集団活動に参加することへのプレッシャーが減った」等が挙げられた。

最近（この1～2週間）の本人の様子については、「怒りっぽくなった・イライラしやすくなった/気分の浮き沈みが大きくなった」(37.6%)、「睡眠の問題が増えた」(28.6%)、「家族とのトラブル（親子/兄弟）が増えた」(23.2%)といったように、何らかの心身の不調が一定数見られた。

アンケートを通じて、現在、多くの発達障害児者やその保護者・家族が日常生活で様々な影響を受けていることが示唆された。感覚過敏等によるマスク着用の困難さに加え、本人や保護者・家族が感染した場合への不安についても自由記述が寄せられた。一方、集団活動が減ったことで精神的に安定した、他者と社会的距離が生まれたことで生活しやすくなった等、＜新しい生活様式＞のメリットについても一定数の言及が見られ、ネガティブな影響だけではないことがわかった。※本発表において、開示すべき利益相反はない。